# よろこび

日蓮宗 顕聖会
本山 妙顕寺
長晉山 本要寺

## 『よろこび』六十二（幸福とは何かの再考）

貫首　齊藤　日軌

幸福の目的とは何か？それは人類意識の進化による光明化といえる。光はそれ自体喜びである。神仏の分霊である個々の人間が輪廻転生によって、獲得した知識、才能、経験、美意識、感情、人格、カルマ、光これらを互いに交換し、更に人格意識を総和することによって、人類意識は進化し、光明化する。ここに大いなる幸せの成就がある。

此れは人類総和の意識自体を物質次元、輪廻から解脱させる。換言すれば神仏自体の大いなる進化であり、解脱である。神である本仏の分霊である人間が物質次元に執着し、苦しみと迷いの輪廻にあることからの解放、総ての闇の意識次元の光明化、これこそが、真の人類のアセンションである。故に神仏はこの人類の目的達成のため人類に幸福感を用意された。その互いの幸福の交換の為めに。

総ての生命が意識、経験を交換し、個が全体の意識幸福を感じられるワンネス・一念三千のよろこび。総ての命が総てに感謝し、総ての命が総ての命に愛を与える。愛が循環するよろこび。

## みおしえ

「ああ、この身体はまもなく地上によこたわるであろう、ーーー意識を失い無用の木片のように、投げ棄てられて。（法句経四〇中村元訳）」

この法は、仏がサーバッティーにおられたとき、ティッサ長老について説かれた。ある日、修行に励んでいたティッサ長老に腫れ物が出来た。腫れ物は大きくなり破裂した。全身に穴があいて悪臭のティッサとよばれた。法衣は膿で汚れ弟子達にも捨てられ、一人臥していた。

仏は心の眼でティッサ長老の悲惨な姿を見、また彼に阿羅漢となる機根が出来ていることを知った。仏は火堂に湯を沸かし、弟子達にベッドを用意させ彼をそこに連れてこさせた。仏自ら彼のからだを湯で洗い、弟子達には法衣を洗わせた。長老は身体も楽になり、心も安定しベッドに臥した。そこで仏は長老に「そなたの身体はまもなく意識を失い無用の木片のように地上によこたわるであろう」と言われた。その言葉を聞いて長老は阿羅漢の境地を得て、息を引き取った。

## 心の言葉

南無妙法蓮華経と唱え
自らは、肉体にあらずして
魂であると知れ